

## 7. 学校での勉強



### ●学校への行きしぶり)))

子どもたちは多くの時間を学校の中で費やしている。それだけに、学校のあり方は、子どもたちの心にさまざまな面で影響を与えよう。

そこでまず、表30に目を通してほしい。これは、「朝、学校へ行きたくない」割合を示している。

「朝、学校へ行きたくない」と思う子は、ハルビンでは、「わりと」の0.9%を含めて、2%にすぎず、74%は「行きたくないともまったく思わない」という。それに対し、「いつも」に「わりと」を含めると、サクラメントの子の35%、ストックホルムの子の33%が「朝、学校へ行きたくない」と答えている。

そして、表30の結果を過去の調査地の中に位置づけてみると、図10のようなプロフィー

ルとなる。

シアトルやサクラメントなどの欧米文化圏の子どもたちは、3割以上が「朝、学校へ行きたくない」と思うことがあると答えている。それに対し、ハルビンやバンコクなどのアジア文化圏の子が、「朝、学校へ行きたくない」と思う割合は1割を下回る。

そして、東京の子は、ソウルの子と同じように、ほぼ2割が「朝、学校へ行きたくない」と思うという。

調査に先だって、各地を訪ねている。そうした印象からいうと、サクラメントの学校はいかにも古き良きアメリカらしきを残しており、明るく楽しそうに見えた。したがって、ああいう学校なら行きしぶる必要はないと思

うのに、子どもたちは学校へ行くのに気が進まないらしい。考えてみると、学校とは子どもにとって、それがどんなに楽しそうでも喜んで行く気になれないところなのかもしれない。そして、そうした気持ちを素直に出せるだけ、アメリカの教育風土はのびやかなのであろうか。

それに反し、ハルビンだと、学校は町の中の希望の星という感じで、子どもはむろん、親たちも学校へ行けばなんとかなると信じている。したがって、とても「学校へ行く気になれない」などと思えないのであろう。

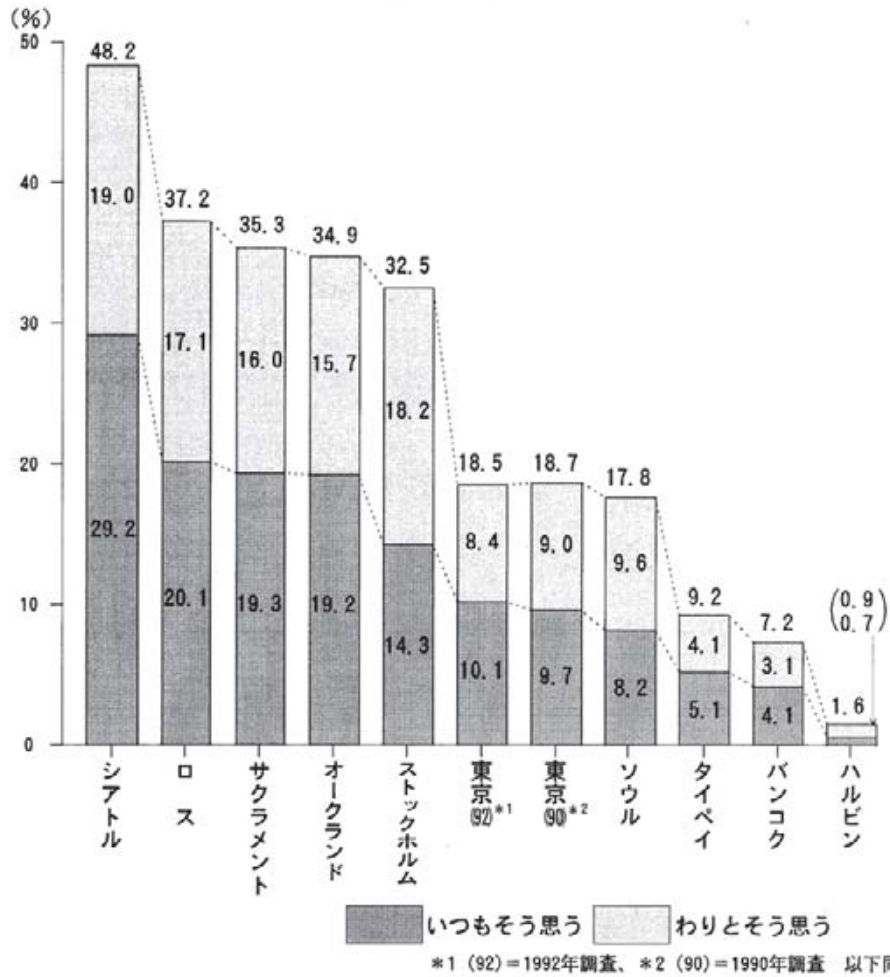
そして、日本のデータは欧米文化圏とアジア文化圏とのほぼ中間に位置している。

表30 朝、学校へ行きたくない

(%)

		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
そう思う	いつも	10.1	0.7	19.3	14.3
	わりと	8.4	0.9	16.0	18.2
	たまに	34.6	13.3	34.2	33.1
そう思わない	あまり	22.3	10.9	18.4	24.6
	まったく	24.6	74.2	12.1	9.8

図10 朝、学校へ行きたくない



## ●勉強機の有無)))

子どもの勉強というと、勉強環境が問題になるが、その象徴として、勉強機の有無をたしかめてみると図11の通りとなる。

さすがに東京の子どもたちは、豊かな社会を反映して、94%が自分の机を持っている。それに対し、バンコクやオークランドの自分の机所持率は5割を下回っている。

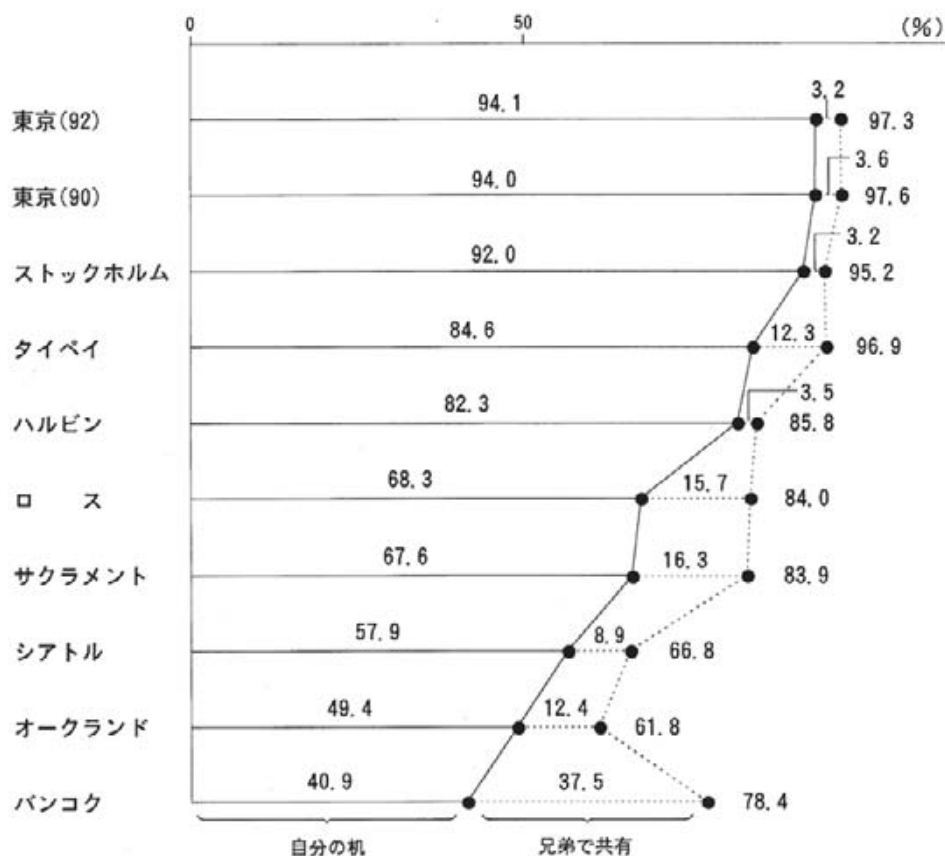
また、サクラメントやシアトルの子どもたちが机を持っている割合は7割を下回っている。そして、この割合はハルビンの82%、タ

イペイの85%より1割以上、数値が低い。

アメリカの場合、すでにふれたように、ミドルクラスの地域を調査対象としているので、経済的に机を買えないわけがないが、それでも机の所持率はタイペイの85%、ハルビンの82%より、1割以上下回っている。

これは、生活全体の中で、勉強の持っている重みが社会によって異なるのを示しているのであろう。したがって、日本や中国などで勉強机を大事にしているのがわかる。

図11 勉強机を持っているか



## ●勉強時間)))

それでは、子どもたちは毎日、どれくらいの長さ、勉強をしているのか。勉強時間については表31の示す通りだが、ハルビンの子どもたちは8時間以上勉強している子が15%に達するので、平均して2時間6分を勉強に費やしている。そして、サクラメントの子どもたちの勉強時間も1時間42分に達する。白人中心の教育意欲の強い地域という状況がこうした数値の背景として考えられる。

勉強というと、日本の子どもたちが最もし

ているように思われがちだが、東京の子どもの勉強時間は58分にすぎない。

そして図12によれば、90年、92年のデータを含めた場合でも、最も勉強をしているのはソウルやハルビン、タイペイのアジア文化圏の子とロスの子どもたちである。

それに対し、東京の子どもたちの勉強時間は、90年の1時間17分、92年の58分のように、他の社会と比べても少ない。

しかし、これは勉強時間だけを比較したか

表31 勉強時間

	(%)			
	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
0分	1.0	1.0	1.8	3.9
1分～30分	46.9	2.3	8.5	38.1
31分～1時間	20.0	16.4	21.0	30.3
1時間1分～1時間30分	16.6	23.2	30.2	18.4
1時間31分～2時間	5.7	19.3	11.1	3.4
2時間1分～2時間30分	4.1	17.0	11.8	2.5
2時間31分～3時間	1.5	6.3	2.8	2.1
3時間1分以上	4.2	14.5	12.8	1.3
平均勉強時間	58分	2時間6分	1時間42分	1時間3分

ら生じたもので、けいこごとのデータを見ると、図13のような結果が得られる。

サクラメントの子はスポーツ、ハルビンの子は外国語などを習っているが、全体としてみると、けいこごとをしている子どもは少ない。とくに、算数や国語の勉強をしている子は1割以下にとどまっている。

たしかに海外でも、スポーツクラブなどを見かけることが多い。しかし、学習塾が日本に特有なのはよく知られた通りである。もっとも、タイペイへ出かけると補習班の名で学習塾が存在しているし、ソウルでも1980年に塾が禁止されているが、読書室の形で自習

ルームがあちこちに見られるし、家庭教師にしている子どもはかなりの割合に達する。

したがって、塾通いは日本に限らず、アジアに共通にみられるように思われるが、それにしても東京の子どもたちのほぼ5～6割は塾通いをしている。

こうした塾通いに東京の子どもはかなりの時間を費やしているので、勉強時間は表31で思われるよりもはるかに長いと考えられよう。というより、塾での勉強を加えると、東京の子の勉強の長さはソウルにほぼ匹敵すると考えられる。

図12 平均勉強時間

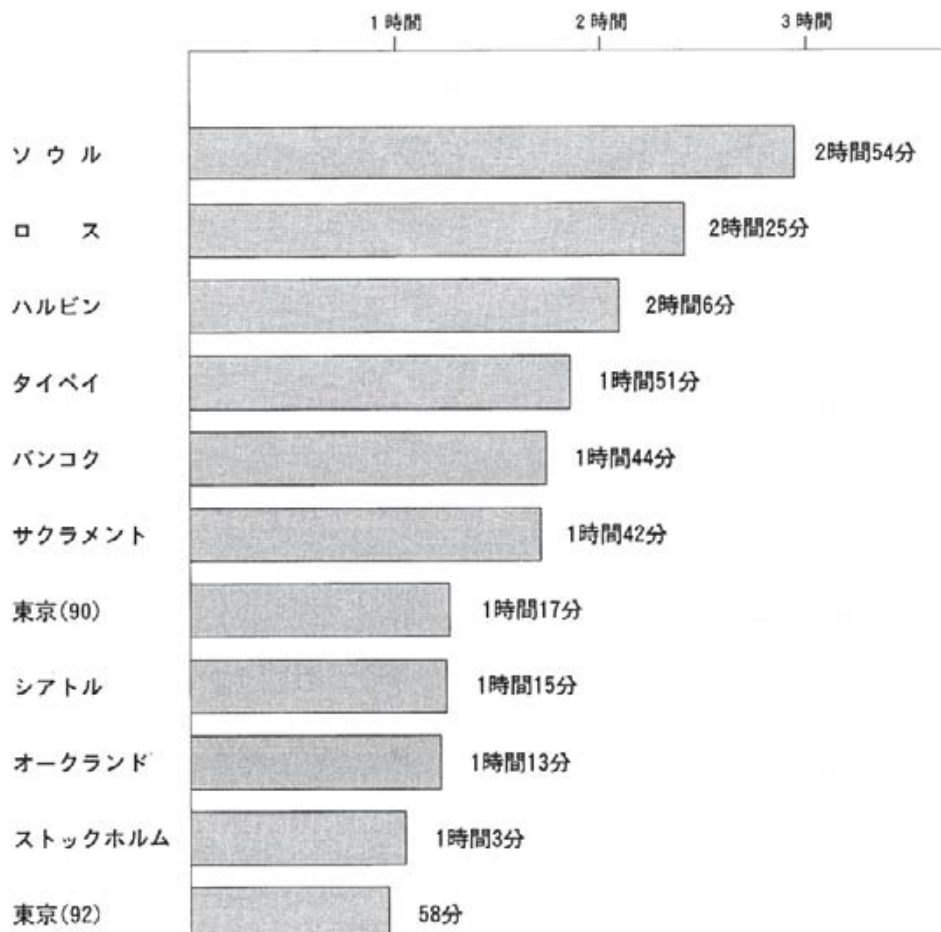
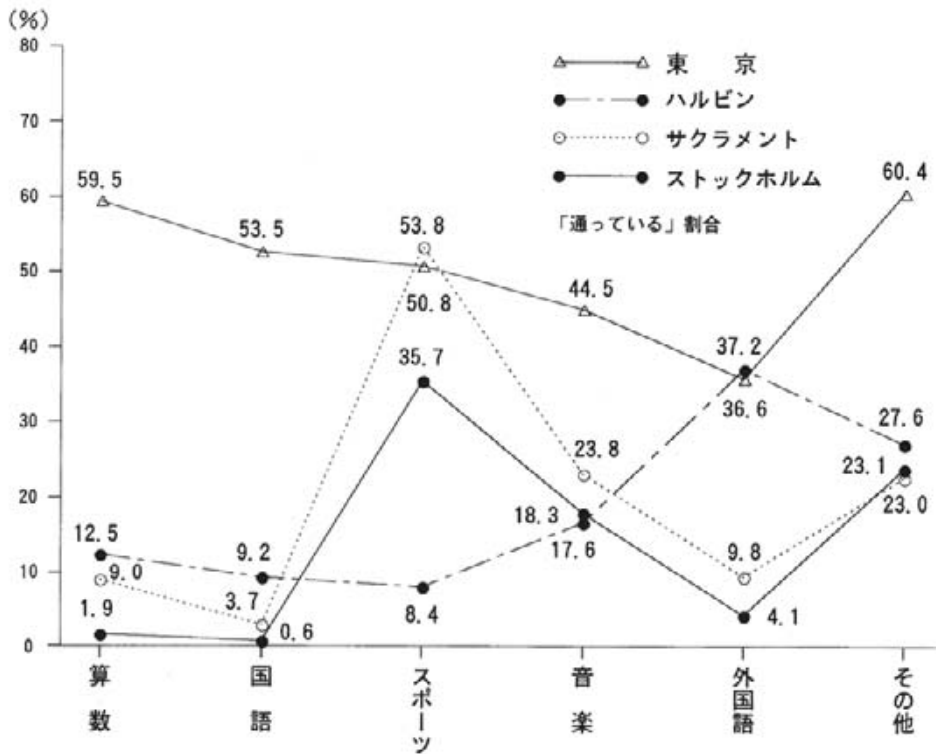


図13 けいこごと



### ●教科の好き嫌い)))

それでは、勉強といったときに、子どもたちはどういう教科をイメージにおくのか。くわしくは巻末の集計表に目を通してほしいが、それぞれの社会によって教科名が異なり、国語がサクラメントやストックホルムでは読みと書きとに分かれているし、ストックホルムでは理科は日本でいう生活科なので、厳密な意味で4つの社会に共通しているのは、算数や体育、音楽にすぎなくなる。

そして、それぞれの社会での教科の好き嫌いをまとめてみると、表32(図14)の通りとなる。どこの社会の子どもたちも、体育や音

楽が好きなのは共通している。そして、算数や国語が好きでないようだが、それでも一日の中での楽しさでもふれたように、ハルビンの子どもが、算数や国語が好きなのが目につく。そして、サクラメントの子どもたちも、算数や国語をそれほど嫌っていない。

しかし、ストックホルムと東京は、理科、算数、国語を好きでない。ストックホルムの子は、自由な環境の中で暮らしているので勉強嫌いといいやすいのであろうし、それとは逆に、日本の子は勉強を強いられているので、算数が苦手になっているのかもしれない。

表32 教科の好き嫌い

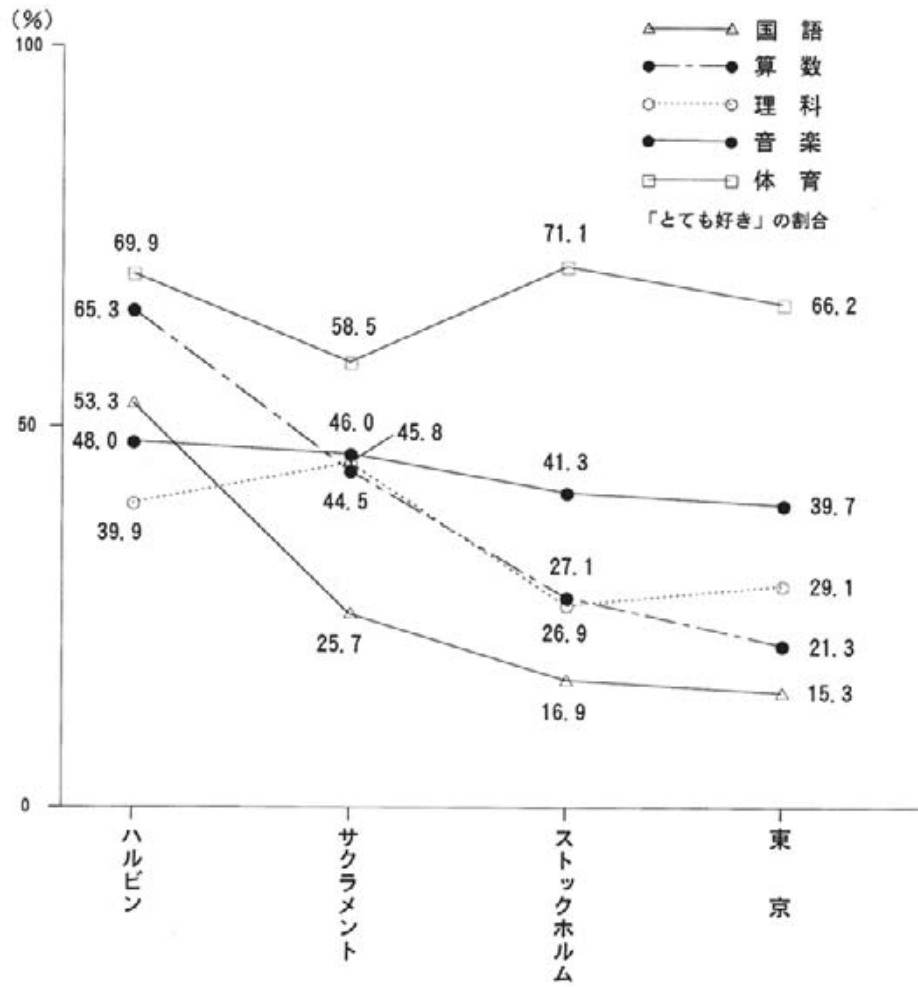
(%)

		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
国 語	とても好き	15.3	53.3	25.7	16.9
	わりと好き	49.2	43.5	40.7	44.1
	あまり好きではない	29.5	2.8	22.9	27.6
	とても嫌い	6.0	0.4	10.7	11.4
読 み (Reading)	とても好き	—	—	34.3	35.0
	わりと好き	—	—	42.7	43.2
	あまり好きではない	—	—	15.3	16.6
	とても嫌い	—	—	7.7	5.2
算 数	とても好き	21.3	65.3	44.5	27.1
	わりと好き	36.0	31.3	30.7	33.5
	あまり好きではない	28.6	3.2	13.9	20.1
	とても嫌い	14.1	0.2	10.9	19.3
理 科	とても好き	29.1	39.9	45.8	26.9 *
	わりと好き	44.4	44.2	30.3	37.6
	あまり好きではない	21.2	14.5	13.8	23.5
	とても嫌い	5.3	1.4	10.1	12.0
社 会	とても好き	21.7	—	25.8	—
	わりと好き	36.9	—	34.8	—
	あまり好きではない	31.1	—	21.0	—
	とても嫌い	10.3	—	18.4	—
体 育	とても好き	66.2	69.9	58.5	71.1
	わりと好き	23.0	23.8	21.1	18.7
	あまり好きではない	6.8	5.3	11.4	6.2
	とても嫌い	4.0	1.0	9.0	4.0
音 楽	とても好き	39.7	48.0	46.0	41.3
	わりと好き	31.0	32.9	31.7	32.2
	あまり好きではない	18.5	13.8	11.6	17.3
	とても嫌い	10.8	5.3	10.7	9.2
手 工	とても好き	—	76.0	—	72.6
	わりと好き	—	19.4	—	20.1
	あまり好きではない	—	3.2	—	5.2
	とても嫌い	—	1.4	—	2.1
英 語	とても好き	—	—	—	26.4
	わりと好き	—	—	—	36.3
	あまり好きではない	—	—	—	22.6
	とても嫌い	—	—	—	14.7

\*生活科



図14 教科の好き嫌い



## ●成績の自己評価))

これまでふれたように、全体としてハルビンの子どもたちが勉強に熱心なのがわかるが、この子どもたちは成績の良し悪しをどう感じているのか。

表33、そしてこれまでのデータをあわせて、

図15に「成績のよい子」の割合をまとめてみた。シアトルやサクラメントなどのアメリカ、そしてストックホルムで成績がよいと答えている者が、「かなりよい」を含めると7割を超える。

表33 成績の自己評価

	よ い		ふつう	よくない	
	とても	かなり		やや	とても
東 京	5.8	12.5	55.8	18.6	7.3
ハルビン	3.9	32.6	48.4	13.5	1.6
サクラメント	28.3	44.7	23.6	2.8	0.6
ストックホルム	22.6	47.1	27.9	1.6	0.8

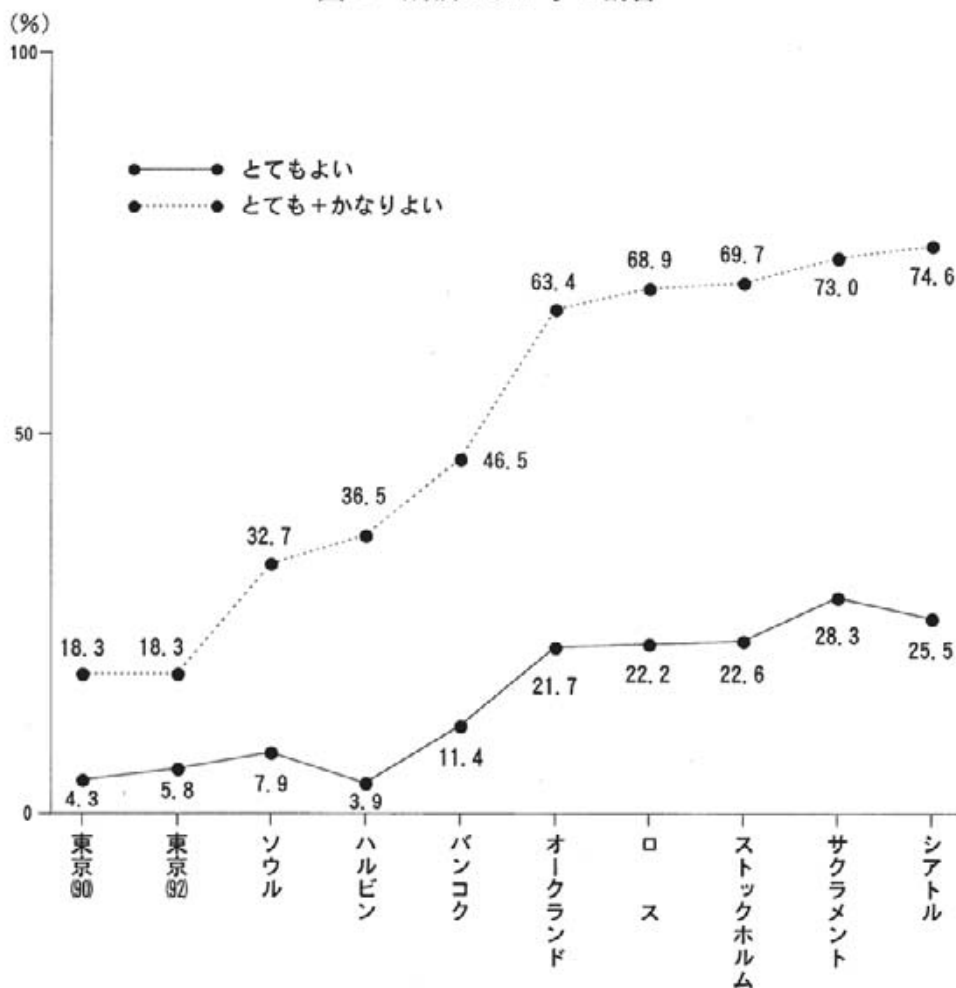
それに対し、ソウルやハルビン、バンコクでは成績に自信を持つ子どもは「かなり」を含めても3割を上回る程度にすぎない。そして東京は、「とても」に「かなり」を加えて、勉強の得意な子どもは18%という数値である。

全体の印象として、勉強が重みを持つ社会にいる子どもたちは、よい成績をとりたいと思う。しかし、思うほどの成績をとれなくて自分に自信を持ってない。それに対し、勉強に

こだわらない社会に暮らす子どもは、ほどほどの成績をとっていると自分に対して思うのであろう。

見方によれば、図15は右のシアトルから左の東京へ、左に移るにつれて、勉強に重みのかかる社会であることを示しているといえなくもない。そうした意味では、比較対象とした地域の中で、勉強の重圧が最もかかっているのは東京の子といえるだろう。

図15 成績のよい子の割合



## ●勉強の得意な理由)))

そこで、あらためて勉強の得意な理由についてたずねてみた。授業をよく聞いているからというのなら、努力が報いられて、成績のよさになるというのであろうし、それとは逆

に、生まれつき頭がいいというのであれば、成績のよさは努力でなく、ある程度まで決められていることになる。

そして、表34 (図16) によれば、「先生の

表34 勉強の得意な理由

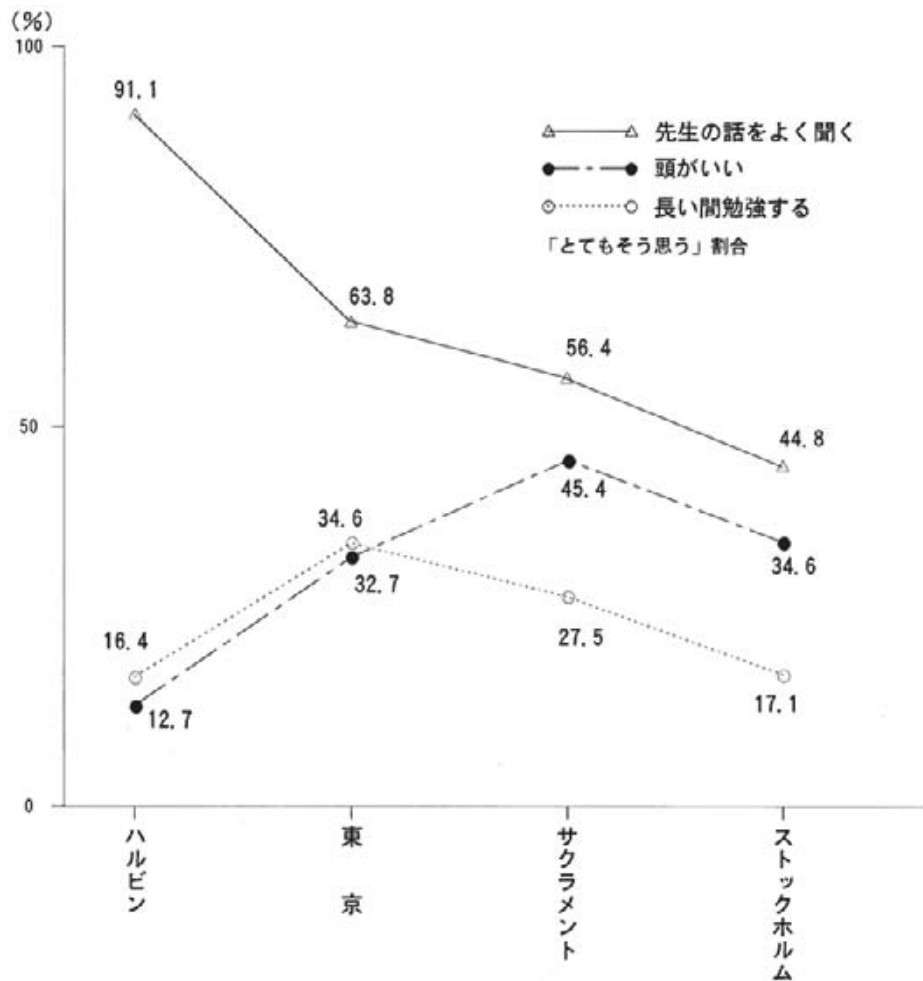
		(%)			
		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
長い間勉強する	とてもそう思う	34.6	16.4	27.5	17.1
	少しそう思う	46.8	49.0	48.5	42.8
	そう思わない	18.6	34.6	24.0	40.1
先生の話をよく聞く	とてもそう思う	63.8	91.1	56.4	44.8
	少しそう思う	27.0	7.7	35.3	45.4
	そう思わない	9.2	1.2	8.3	9.8
頭がいい	とてもそう思う	32.7	12.7	45.4	34.6
	少しそう思う	32.4	40.7	41.8	43.9
	そう思わない	34.9	46.6	12.8	21.5

話をよく聞くから成績がよくなる」と努力を信じるのがハルビン、そして東京の子どもたちで、それに対し、「生まれつきの頭のよさ」を信じるのはサクラメントやストックホルムの子どもたちになる。

この図16と図15とを関連させると興味深い。成績のよさは、ある程度まで生まれつきと思っている地域の子どもたちは成績に自信を

持って「かなりよい」と答えている。それに対し、成績は努力の反映と思っている社会の子どもたちは、成績に自信を持ってないでいる。誰でも努力をすればよい成績がとれるはずなのに、思うような成績をとれていない。そうであるから、自分の成績に自信を抱けないのであろう。

図16 勉強の得意な理由



## 8. 将来像



### ●大学進学希望)))

子どもたちの中でも、ハルビンの子、そして東京の子が勉強に心を配っているのがわかる。そして、子どもたちの希望する学歴は表35のように、ハルビンの子どもたちの94%が大学へ進学したいという。

そして、88年、90年のデータを加えて、大学進学希望率を調べてみると、図17のように、最も大学への希望が高かったのはハルビンと

バンコクで、それに対し進学希望率が低いのは東京とオークランドとなる。

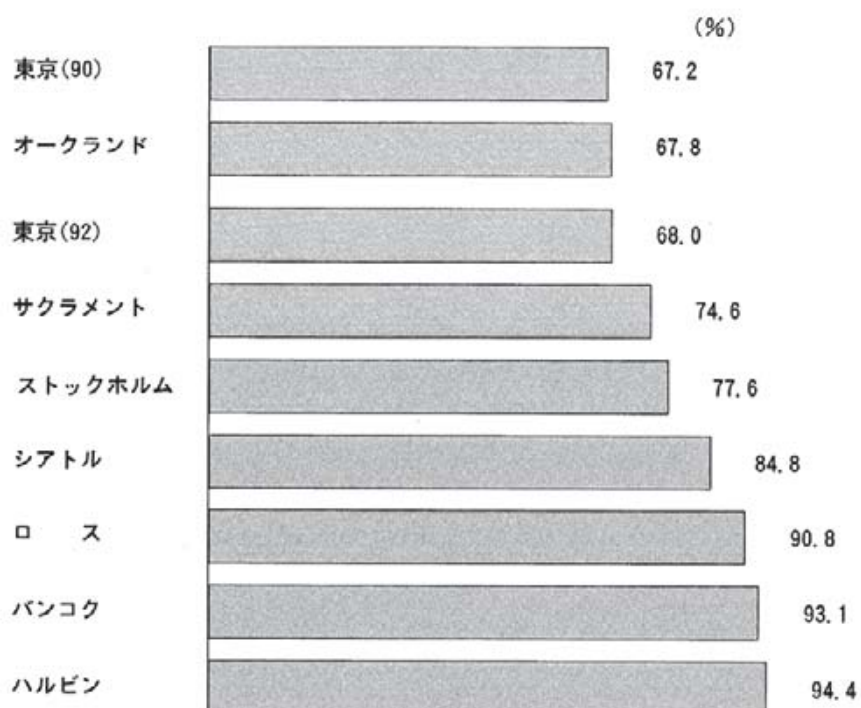
広い土地に少ない人口、そして羊の多いオークランドでは、大学へ進む気持ちも弱まってこよう。それに対し、日本だと受験勉強がむずかしく、大学へ入りにくいので、入れそうもないと子どもたちが達成を断念するのであろうか。

表35 希望する最終学歴

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
中学校	2.2	0.2	20.1	5.3
高 校	29.8	5.4	5.3	17.1
2年制大学	—	—	8.2	34.0
大 学	68.0	94.4	66.4	43.6
小 計	68.0	94.4	74.6	77.6

図17 大学へ進学したい割合



## ●つきたい仕事)))

大学進学はむろん、将来の生活を考えることであろうか。そうだとすると先の結果から、東京の子どもたちはおとなになっても、大きな仕事につくのがむずかしいと思っているのであろうか。

子どもたちのつきたい仕事については表36にくわしい。これらの職種は社会によって異なるので、表中のように、それぞれの社会によって独自の項目をふくませている。

そうはいつでも表36ではわかりにくいと思

われるので、それぞれの社会でつきたい仕事の上位5項目をあげると表37となる。

全体として、プロスポーツの選手の人気が高いが、ハルビンでは警察官になりたい子どもが多い。そして図18によれば、サクラメントの子どもたちは医師や裁判官を望む割合が多い。それに対し、東京やストックホルムの子どもたちはつきたい割合がそれほど多くはない。



表36 つきたい仕事

(%)

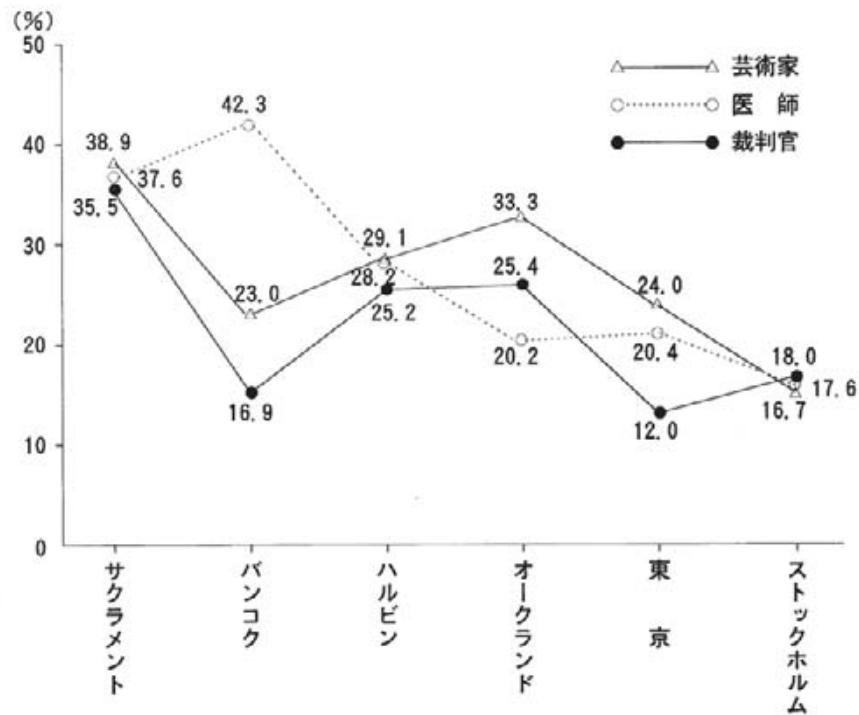
	東 京	ハルビン	サクラメント	ストック ホルム
プロスポーツ選手	45.1	14.0	36.6	40.0
小学校（幼稚園）教師	41.6	19.3	31.3	12.1
大会社の社長	38.3	21.2	23.2	4.3
自営業	35.1	5.2	23.4	24.1
マンガ家	33.7	—	18.6	14.8
テレビタレント	33.0	22.8	16.9	35.3
デザイナー	31.0	11.3	30.0	1.6
芸術家	24.0	29.1	38.9	16.7
警察官	21.5	30.4	23.8	20.9
獣 医	21.1	—	28.0	22.5
医 師	20.4	28.2	37.6	17.6
サラリーマン	19.8	—	19.0	6.5
看護婦	19.0	7.5	16.9	10.9
美容師	15.0	3.1	21.9	20.5
技 師	12.9	14.3	21.2	11.5
大学教授	12.0	10.0	8.1	9.8
裁判官	12.0	25.2	35.5	18.0
新聞記者	11.3	18.4	14.2	18.6
政治家	10.8	10.1	7.6	3.0
公務員	9.4	18.2	8.7	1.9
消防士	7.8	—	10.9	9.0
宇宙飛行士	—	—	14.2	—
パイロット	—	17.4	18.8	19.2
高校教師	—	—	11.6	8.7
運転手	—	7.3	—	2.2
スチュワーデス	—	18.2	—	16.1
解放軍	—	14.8	—	—
労働者	—	2.3	—	—
農 業	—	0.8	—	—
コック	—	—	—	21.4
歌 手	—	—	—	22.2
旅行業者	—	—	—	20.9
プログラマー	—	—	—	26.9
馬の調教師	—	—	—	20.5
保 母	—	—	—	16.1
作 家	—	—	—	11.7

表37 つきたい仕事(上位5種)

(%)

	東京		ハルビン		サクラメント		ストックホルム	
1	プロスポーツ選手	45.1	警察官	30.4	芸術家	38.9	プロスポーツ選手	40.0
2	小学校教師	41.6	芸術家	29.1	医師	37.6	テレビタレント	35.3
3	大会社の社長	38.3	医師	28.2	プロスポーツ選手	36.6	プログラマー	26.9
4	自営業	35.1	裁判官	25.2	裁判官	35.5	自営業	24.1
5	マンガ家	33.7	テレビタレント	22.8	小学校教師	31.3	獣医	22.5

図18 つきたい仕事



## ●将来の見通し)))

ストックホルムはのんびりとゆったりとした生活を送っているのので、そんなにむきになって未来に大きな望みを抱く必要はないのかもしれない。それに対し、東京の子どもた

ちは大学へ入りにくいから大きな仕事にもつきにくいと考えているのであろう。

そこで、将来の見通しは表38のように、全体としてサクラメントの子どもが将来に夢を

表38 将来の見通し

(%)

		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
有名人になる	きっと	11.0	31.7	28.1	18.9
	たぶん	14.6	43.4	26.8	19.1
	小 計	25.6	75.1	54.9	38.0
皆から好かれる人になる	きっと	12.3	56.2	40.8	32.3
	たぶん	48.6	41.7	41.4	51.7
	小 計	60.9	97.9	82.2	84.0
お金持ちになる	きっと	12.7	6.6	37.8	18.6
	たぶん	21.3	29.7	34.6	21.2
	小 計	34.0	36.3	72.4	39.8
仕事で成功する	きっと	19.1	59.5	78.8	27.2
	たぶん	40.2	35.2	18.4	43.1
	小 計	59.3	94.7	97.2	70.3
よい父(母)親になる	きっと	26.5	61.8	76.4	62.1
	たぶん	47.0	33.0	14.7	33.5
	小 計	73.5	94.8	91.1	95.6
しあわせな家庭を作る	きっと	40.7	68.7	83.3	72.0
	たぶん	37.4	28.5	12.8	23.2
	小 計	78.1	97.2	96.1	95.2

抱いている。「仕事で成功する」や「よい親になれる」など、「きっとそうになれる」と思っている者が8割前後に達する。

図19に「きっとそうになれる」にしぼって、将来の見通しをまとめてみたが、主要な傾向は以下の通りであろう。

① 東京を除く地域の子どもたちはよい親になり、しあわせな家庭を作っていけると思っている。

② サクラメント、そしてハルビンの子どもは仕事の面で明るい見通しを抱いている。しかし、ストックホルムの子どもは家庭面での見通しは明るい、仕事面では「たぶん」

やれるだろうにとどまる。

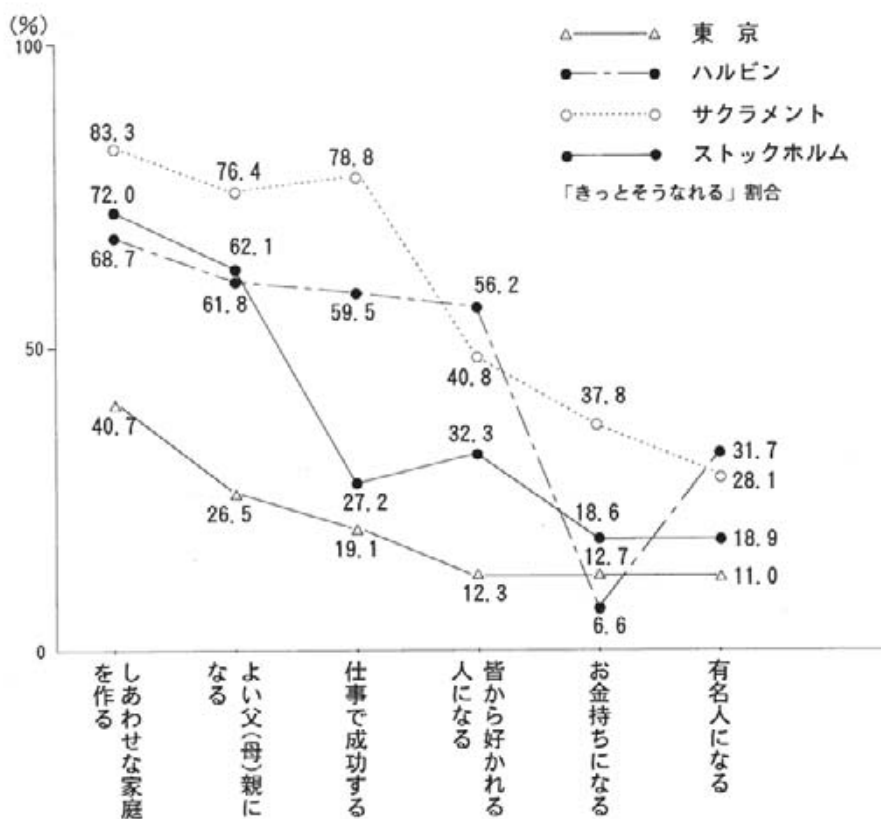
③ ハルビンの子どもは、お金持ちになるのはむずかしいと思っている。

④ 全体として、東京の子どもは将来、仕事はむろんのこと、家庭のことを含めて大きなことはできないと考えている。

つきつめていくと、以下のように要約できよう。

- ・将来に夢を抱いている——サクラメント
- ・お金持ちは無理かもしれないが、その他の面では明るい——ハルビン
- ・家庭面での見通しは明るい、仕事面で見通しが暗い——ストックホルム
- ・全体としてだめだと思っている——東京

図19 将来の見通し



## 9. 子どものしあわせ感



さてこうした子どもたちの暮らしの中で、子どもはどのくらいしあわせ感をもっているのだろうか。子どもにとって、自分の人生は、

そして世界は楽しいことにあふれた生き生きしたものとして感じられているのだろうか。

### ●自己評価)))

心理学の研究によると、人生や自分の毎日の生活を楽しいとか幸福感をもって受けとめられるかどうかは、基本的に自分をポジティブに、つまり有用感をもって受けとめられるかどうかによる、と言われる。

このしあわせ感の基本にある自己像は、4つの地域でどう形成されているのだろうか。

表39(図20)は表に掲げた7つの側面について自分を評価した結果である。図が示すように、7つの特性について自分を「あてはまる」とする子は、全体としてサクラメント>

ストックホルム>東京の順に少なくなっており、またハルピンは多少特異なカーブを描いている。「正直、親切、よく働く」子がとび抜けて大きく肯定されている。サクラメントの数値はこの3項目について38%、38%、42%で東京の10%、12%、14%よりとび抜けて高いが、ハルピンの子はそのサクラメントの数値よりまた一段と高く、49%、51%、44%という信じられない高さである。

ちなみに、「あまり・ぜんぜんあてはまらない」とする自己評価の低い子は、この3項

目について次のようになっている。

	東京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
正直	54.7%	9.5%	9.4%	14.5%
親切	52.0	9.0	8.8	7.0
よく働く	51.8	14.0	11.8	23.0

これらはそろって道徳性に関連した項目だが、日本の子が5割以上もこの点で自分にネガティブな評価をしているのは、異常な感じすら受ける。日本の子はそんなにも公德心がない子どもたちなのだろうか。それは実体というより自己像の受けとめ方の歪みなのではなからうか。

ちなみにハルビンの子の自己評価は「勉強ができる、人気がある、スポーツがうまい」といった能力的な部分で低くなっている。比

較的客観的に判断できる部分はそれなりに評価されているが、それ以外の部分の数値がハネ上がっているのだ。

地域ごとにみると他より高いのは、  
ストックホルム—勇気がある、親切  
サクラメント—よく働く、スポーツがうまい  
ハルビン—親切、正直

と特徴がみられるが、東京の子はどれも低くて、イメージが浮かび上がらない。数値の多いほうからいえば「勇気がある、スポーツがうまい」だが、今ひとつピンと来ない。全体に数値が低い中での上位だからだろう。

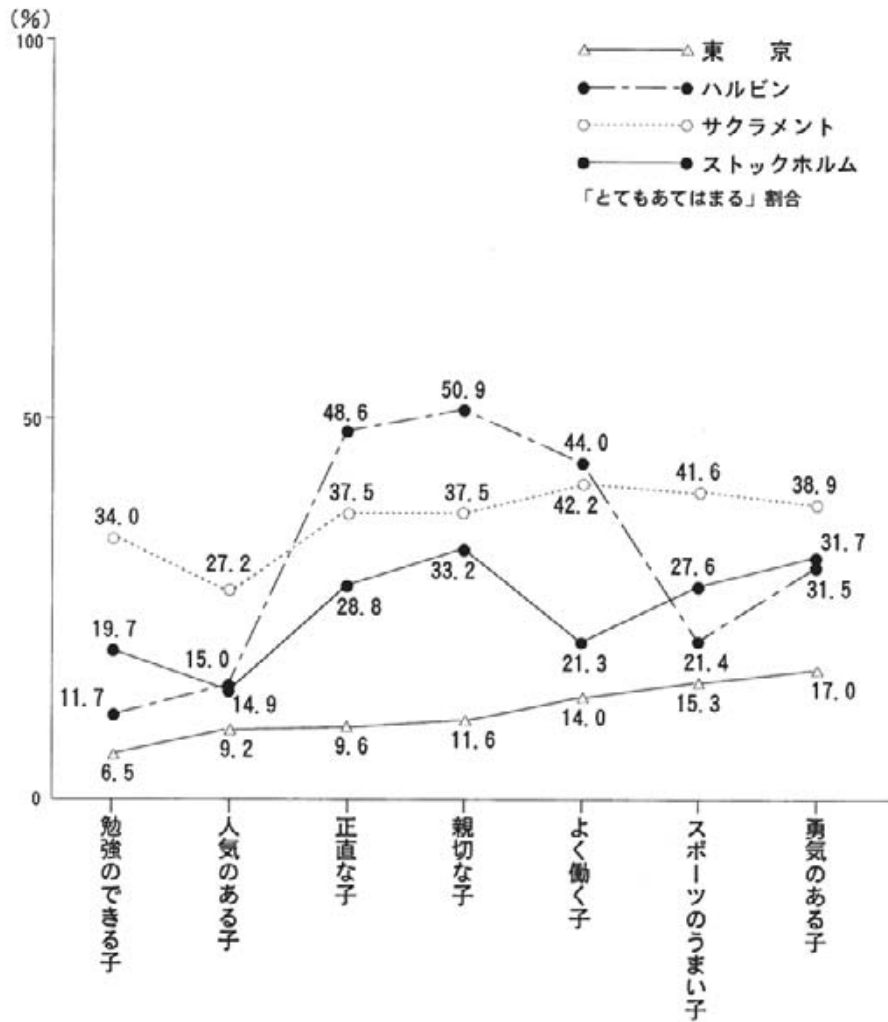
先にみた成績の自己評価の低さとあわせて、日本の子どもの自己像には大きな歪みがあることを再度確認させられる結果のようだ。

表39 自己評価

	東京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
勉強のできる子	6.5	11.7	34.0	19.7
人気のある子	9.2	15.0	27.2	14.9
正直な子	9.6	48.6	37.5	28.8
親切な子	11.6	50.9	37.5	33.2
よく働く子	14.0	44.0	42.2	21.3
スポーツのうまい子	15.3	21.4	41.6	27.6
勇気のある子	17.0	31.5	38.9	31.7

「とてもあてはまる」割合

図20 自己評価



## ●基調にある気分))

とりたてて何が辛いとか何かで困っているということではなく、何となく気分が落ち込む日があるものだ。ふしあわせ感とかうつ状態というのでは少しオーバーかもしれない。気分の基調が晴れやかでなくて、いわば灰色がかった状態だ。この種の設問を2つ用意した。

「毎日がつまらない」

「私は運が悪い」

の反応を見ていくことにしよう(表40、図21)。

まず、「毎日がつまらない」をみると、さすがにがつまらないとまで感じる子は、学校へ行きたくない子よりずっと少ない。「いつも・わりとそう思う」子を抜き出してみると、サクラメントの子が17%で最も多く、ストックホルム12%、ハルビン9%、東京8%という順だ。逆に「まったくそう思わない」子の割合は、ハルビン、東京が5割を超えるのに、サクラメントとストックホルムは約2割でしかない。「つまらない」という灰色気分は、成熟社会にただよう特徴なのかもしれない。

また「私は運が悪い」を見てみると、なぜか「いつも・わりとそう思う」の小計の数値は、東京(23%)>サクラメント(18%)>ストックホルム(16%)>ハルビン(7%)となっている。なぜ東京の子はこんなに自分

を不運と思っているのだろうか。

ちなみに「運が悪い」と「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」子の割合を抜き出して、第1回、2回の結果と共に作図したのが図22である。全体の中では、ハルビン(61%)、ソウル(41%)の強い否定率は、子どもの中にある一種の勢いのようなものを感じさせられ、逆にそれが感じられないのがストックホルム(9%)である。東京は例によって中間だ。

これをもう少しわかりやすい形で数字にしてみると、シアトルからストックホルムまでの欧米文化圏の5地域、東京、アジアの4地域の数値を平均してみると、次のようになる。

欧米文化圏——23.2%

東京———32.3

アジア———45.1

(運が悪いを強く否定する子の%)

欧米文化圏ではストックホルムの低い数値が、そしてアジアではハルビンの高い数値が影響しているものの、仮にこの2つの値をはずして計算してみても、強い否定率はアジア>東京>欧米文化圏の大小関係にあることは変わりが無い。



表40 気分の暗さ

(%)

		そう思う			たまに そう思う	そう思わない	
		いつも	わりと	小計		あまり	まったく
毎日がつまらない	東京	4.5	3.9	8.4	14.9	25.5	51.2
	ハルビン	4.2	4.4	8.6	17.7	14.8	58.9
	サクラメント	6.5	10.7	17.2	35.6	28.7	18.5
	ストックホルム	3.9	8.4	12.3	32.0	34.3	21.4
私は運が悪い	東京	13.8	9.5	23.3	22.0	23.0	31.7
	ハルビン	3.5	3.7	7.2	18.3	13.8	60.7
	サクラメント	9.2	9.0	18.2	28.0	31.2	22.6
	ストックホルム	5.7	10.7	16.4	42.6	31.6	9.4

図21 「毎日がつまらない」

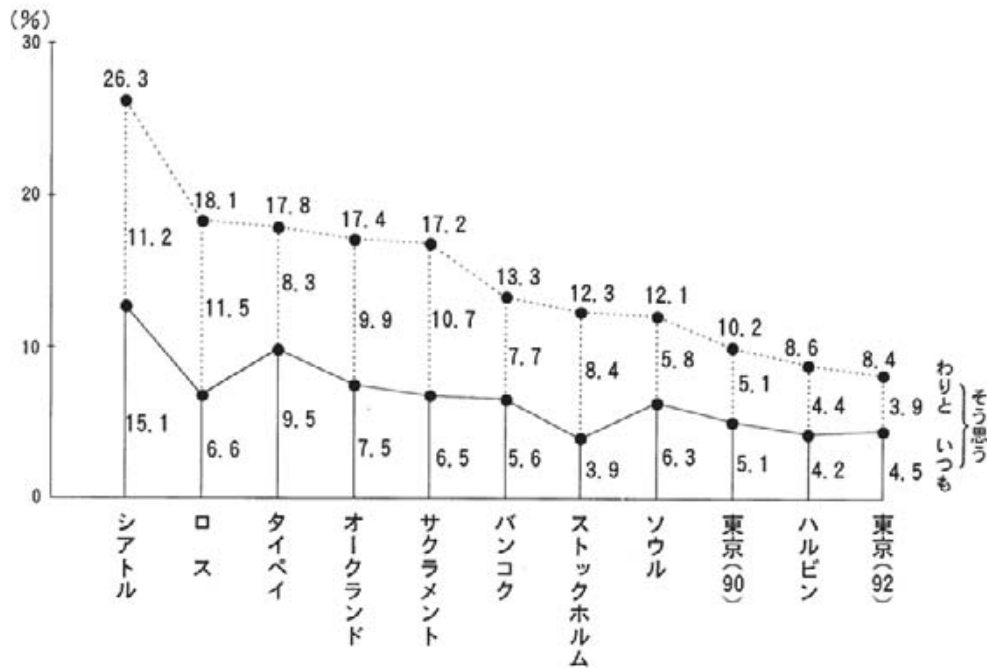
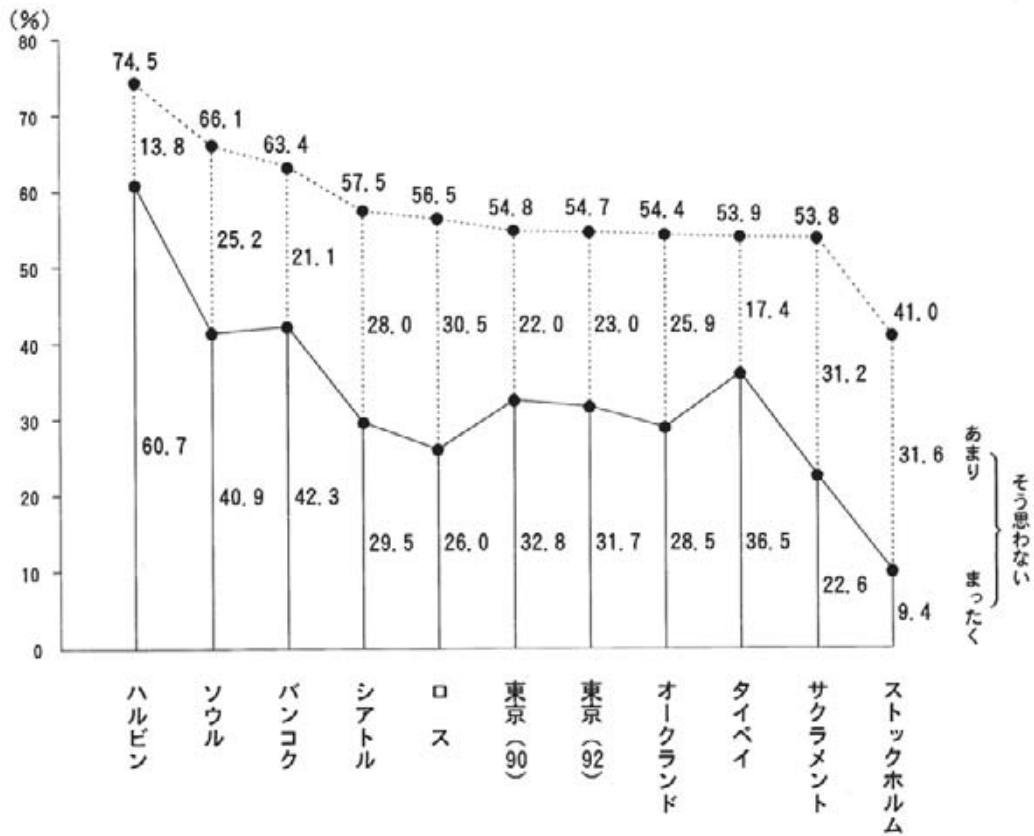


図22 「私は運が悪い」  
 -否定する子-



## ●しあわせ感について)))

このような日常の気分や感情の上に「しあわせ感」は位置するものと考えられる。子どもに「しあわせですか」とたずねてみよう。

表41だが、まずお断りしたいのはハルビンの数値は「しあわせですか」ではなく、「学校へ行くのは楽しいですか」と質問を変更した結果で、本当はこの表からははずすべきかもしれない。予備調査の段階で中国側から「社会主義の国、中国では全員がしあわせなはずであり、この項目は無意味だから削除してほしい」と要請があったためである。しかしこれまでのデータから判断すると、ハルビンの

子どもたちのしあわせ感は（もし調査ができたとして）ほぼこの位置に近いところにあるように思われるので、あえてカッコつきで加えてある。

ここでもやはり発展途上型社会の子に、しあわせ感が強い結果が見いだされる。

物質の豊かさと幸福感は反比例するのだろうか。学校のもつ価値、家庭崩壊、都市化、高学歴化など、様々の条件が複合した結果なのであろう。ここでも東京の子は、欧米文化圏とアジアの境目に位置していることが表41からわかる。

表41 しあわせ感

(%)

	しあわせ		小 計
	とても	かなり	
(ハルビン)	(67.8)	29.7)	(97.5)
ソ ウ ル	57.6	19.0	76.6
タイペイ	56.2	24.1	80.3
バンコク	53.2	25.7	78.9
東京 (90)	45.2	25.6	70.8
東京 (92)	44.8	25.6	70.4
ストックホルム	35.9	39.6	75.5
ロ ス	33.9	39.9	73.8
シアトル	29.6	35.0	64.6
サクラメント	28.0	38.1	66.1

## ●成長欲求の強さ)))

子どもが「早くおとなになりたい」と思うのはごく自然な発想だろう。子どもは能力的にも劣っており、おとなのもっている多くの権利も制限されている。早くおとなになって、禁止されているもの——車の運転とか、酒を飲むなどの——をやってみたいとか、親に拘束されず自由に行動してみたいとかの自立や独立への意志が強ければ、おとなになる日が待たれるのは当然だろう。

しかしもし、おとな社会に不安や危険を感じていたり、自立や独立の欲求が弱かったり、大きく活動しようとするエネルギーを欠いている場合には「いつまでも子どものままでいたい」とするピーターパン願望が強くなるだろう。そして時には、現状があまりに辛かったり、適応するためにエネルギーを使い尽くしてしまった状態では、今のまま子どもでいることにすら耐えられず「幼稚園時代へ

表42 成長欲求

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
早くおとなになりたい	38.6	82.0	31.2	17.8
子どものままでいたい	39.7	9.5	61.1	71.9
小さい頃に戻りたい	21.7	8.5	7.7	10.3

戻りたい」と退行欲求を示すかもしれない。  
この点に接近しようとしたのが表42である。  
表が示すように、ハルビンの子は信じられないほどに、「早くおとなになりたい」と願っている。82%という数値は、2位の東京の39%と比べて大差である。

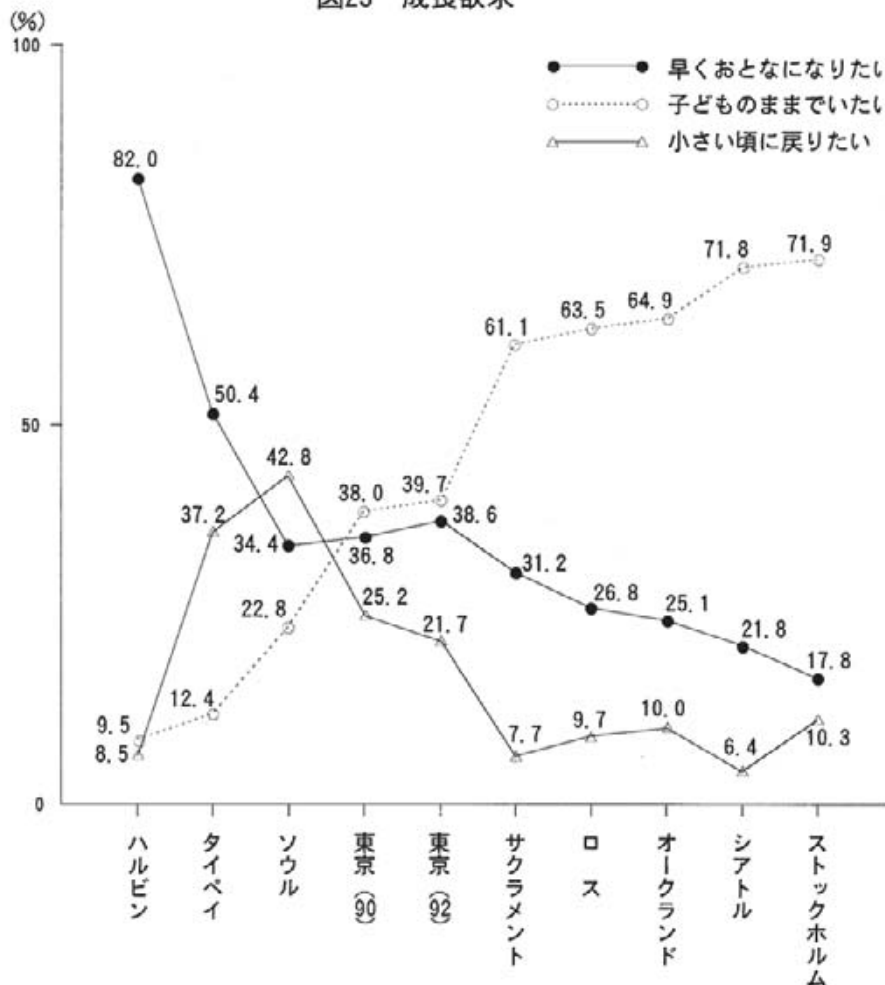
逆に「子どものままでいたい」とするおとなへの依存または将来への不安は、今回のデータではストックホルムの72%、サクラメントの61%が群を抜いている。ちなみに東京は40%、ハルビンは10%でしかない。

これを作図した図23を見ると、欧米文化圏のストックホルム、シアトル、オークランド、ロスが「子どものままでいたい」願望が強い

ことがわかる。ハルビン、タイペイ、ソウルの値は格段に低い。この数値は学校へ行きたくなかったり、ふしあわせだったりする感情と同じカーブをグラフ上に描いている。

すなわち、「早くおとなになりたい」社会では学校の価値が高く、子どもは人生に勢いをもって臨み、しあわせ感も強い。これはアジアにあてはまる。逆に「子どものままでいたい」社会では、学校がつまらなく、子どもの人生には勢いがなく、しあわせ感も大きくなく、なんとなく子どもらしさに欠ける。これは欧米文化圏にあてはまる。そして日本の子どもは、その中間に位置する状態が特徴的だ。

図23 成長欲求



## 10. 性差をめぐって



### ●男の子・女の子の生き方)))

女の子の生き方は社会の影響を受けるといわれる。そこで、大きくなってから、どういう生き方をしたいのかを女子にたずねると表43(図24)の通りとなる。

ハルピンは「子どもを持たずに働く」の15%を含めると、100%が仕事を持つと答えている。そしてストックホルムも、仕事を続ける子が82%で、これに子どもを持たずに働くの5%を含めると、87%が仕事を続けるという。

ハルピンは社会主義の社会らしく、男女差がなく、女性の働く社会を作っているし、ストックホルムも理想追求型の福祉社会らしく、男子と同じように女子が働いている。とくに70年代後半からの女性運動の成果で、社会的な男女差はほとんど撤廃されたと聞く。

それに反し、東京の女子の61%は「結婚したら家庭に入る」と答えている。そして表43(図24)が示すように、家庭に入りたいと答える女子が5割を超えるのは東京だけで、その他のバンコクやオークランドでも3割を下回っている。

そして男子の回答も、ハルピンやストックホルムの子どもたちは、結婚しても妻は働くと思っている(表44、図25)。つまり、男子も女子も共働きが当然と考えている。それに対し東京の男子は、妻は家庭に入ってくれると思っている。

日本では、女子が家庭に入るのがあたり前のように思いがちだが、それよりむしろ、女子が働くほうが当然の社会があるのがわかる。

表43 女子の結婚観（女子）

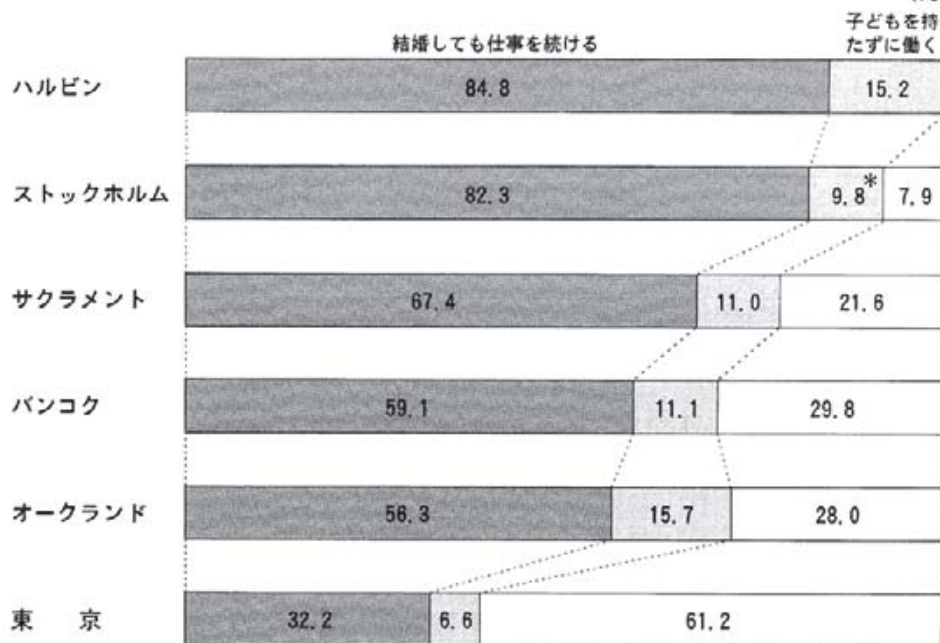
（％）

	結婚しても 仕事を続ける	結婚したら 仕事をやめる	子どもを持たずに 働く
東京	32.2	61.2	6.6
ハルビン	84.8	0.0	15.2
サクラメント	67.4	21.6	11.0
ストックホルム	82.3	7.9	4.7

（ストックホルムは「結婚しない」が5.1％）

図24 女子の結婚観（女子）

（％）



結婚したら仕事をやめる

\*「結婚しない」5.1%を含む

表44 男子の結婚観（男子）

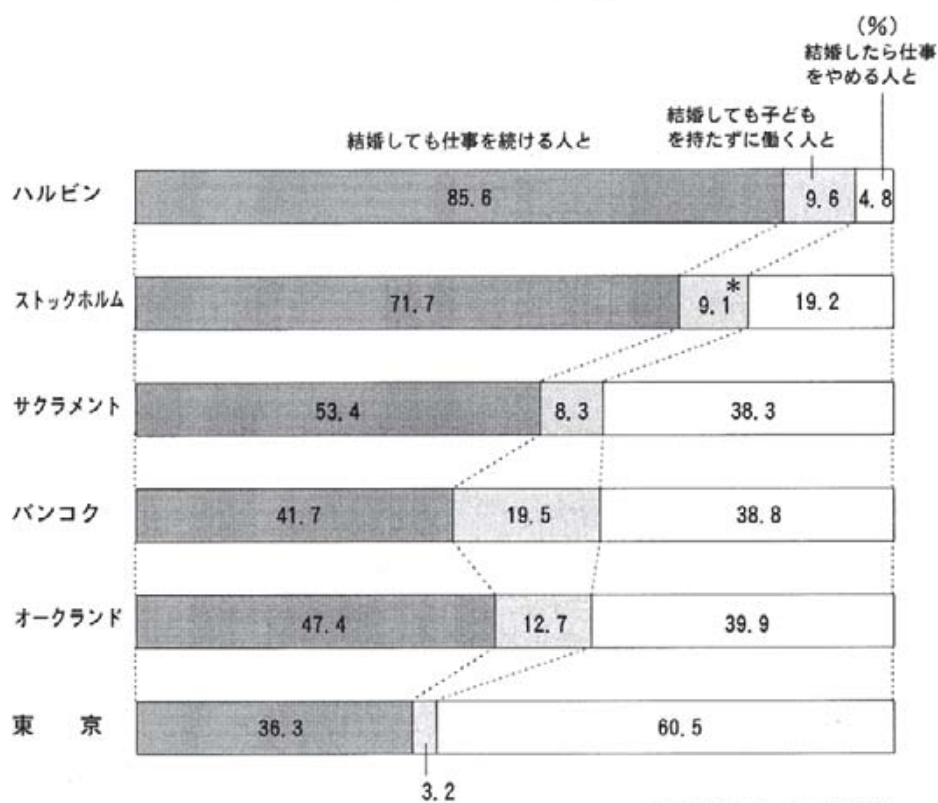
(%)

	結婚しても 仕事を続ける人と	結婚しても子どもを 持たずに働く人と	結婚したら 仕事をやめる人と
東京	36.3	3.2	60.5
ハルビン	85.6	9.6	4.8
サクラメント	53.4	8.3	38.3
ストックホルム	71.7	2.3	19.2

(ストックホルムは「結婚しない」が6.8%)

図25 男子の結婚観（男子）

(……人と結婚したい)





## ●性別の持つ意味)))

そうした性別の持つ意味は、表45の家の手伝いにみることができる。それぞれの項目で女子を100とした割合の男子の割合を求めているのでわかるが、東京の場合、すべての項目で100%を下回っている。つまり、東京はすべての点で、女子のほうが家事を手伝っている計算になる。それに対し、その他の都市では、ハルピンは買い物や掃除、サクラメントは庭や玄関の掃除、ストックホルムは皿洗

いや夕食の手伝いなどの面で、男子のほうが女子よりも手伝う割合が多い。

したがって、他の社会では男の子も女の子と同じように家事を手伝っているが、東京の子どもたちは家事は女の子の仕事と考えている。そうした意味で、東京が一番性差にとらわれているように思われるが、大学進学については表46のように、ストックホルムを除き、性差はほとんど認められず、むしろ男子より

表45 家の手伝い × 性差

(%)

	東京			ハルピン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	男子/女子*	男子	女子	男子/女子*	男子	女子	男子/女子*	男子	女子	男子/女子*
洗濯	5.8	10.7	54.2	15.7	16.7	94.0	18.4	24.1	76.3	2.9	4.0	72.5
夕食の買い物	15.8	21.3	74.2	39.8	33.9	117.4	31.2	35.8	87.2	7.7	8.4	91.7
庭や玄関の掃除	13.6	15.8	86.1	19.4	23.3	83.3	33.3	8.6	387.2	11.7	25.9	45.2
部屋の掃除	21.2	28.5	74.4	54.4	52.9	102.8	40.7	46.1	88.3	31.6	20.9	151.2
皿洗い	12.7	29.8	42.6	46.8	53.8	87.0	25.5	39.2	65.1	25.1	13.7	183.2
夕食の手伝い	17.7	39.1	45.3	16.9	9.7	174.2	31.2	38.1	81.9	19.3	15.2	127.0

「毎日+わりと」する割合

○ = 指数が100を超える項目

\*  $\frac{\text{男子}}{\text{女子}} \times 100$

も女子のほうが大学進学希望率は高い。

それでは、自己評価は性差とどう関係しているのか。表47に示したように男子を100としたときの女子の割合を、それぞれの項目についてまとめ、100%を超えた項目、つまり、女子のほうが自己評価の高い項目に○をつけたのでわかるように、東京の女子は男子よりも自己評価が低い。

それに対しサクラメントだと、スポーツや

勇気は男の子にかなわないが、正直さや親切さ、よく働くのは自分のほうが上だと、女の子たちは思っている。また、ストックホルムは、正直さは男子のほうが上だが、スポーツや勇気、友だちからの人気などでは、女の子のほうがはるかに上だと自己評価している。

図26に示したように、ストックホルムの女の子たちは、男子よりも自己評価が高い。というより、女子のほうが自信にあふれている。

表46 大学進学希望 × 性差

	(%)		
	男子	女子	女子 / 男子
東京	66.1	70.1	106.1
ハルビン	93.0	95.8	103.0
サクラメント	66.5	66.5	100.0
ストックホルム	41.5	34.6	83.4

正直に言って、こうした結果を目にすると、日本とはまったく異質の社会が存在しているのが実感を持って迫ってくるのを感じる。

そして、将来の見通しについても表48の通りで、東京の女子たちは男子よりも将来について実現を低く見積っている。それに対しストックホルムやサクラメントの女子は、男子より多くの面で明るい見通しを未来に抱いている。「仕事で成功する」についても、男子

よりも女子のほうが見通しが明るい。またハルビンも「皆から好かれる」や「よい親になれる」と思う割合は、男子よりも女子のほうが高い。

こう考えてくると、今回の比較した地域の中で、男女差の最も大きく、女子の意欲が低いのが東京、それに対し、女子が男子と対等、あるいはそれ以上に意欲にとんでいるのがストックホルムという感じになる。

表47 自己評価 × 性差

(%)

	東 京			ハルビン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子
スポーツのうまい子	20.4	9.8	48.0	29.7	13.4	45.1	59.8	24.0	40.1	15.9	38.9	(244.7)
人気のある子	12.4	5.8	46.8	17.9	12.3	68.7	32.3	22.2	68.7	10.8	19.2	(177.8)
勉強のできる子	9.4	3.6	38.3	14.6	8.9	61.0	33.9	34.3	(101.2)	17.4	22.2	(127.6)
正直な子	11.2	7.9	70.5	44.9	52.0	(115.8)	35.8	39.1	(109.2)	30.6	27.7	90.5
親切な子	13.1	10.1	77.1	49.5	52.0	(105.1)	33.1	41.8	(126.3)	30.5	36.0	(118.0)
よく働く子	17.6	10.1	57.4	40.7	47.1	(115.7)	41.4	43.1	(104.1)	23.2	19.7	84.9
勇気のある子	19.1	14.8	77.5	39.7	23.7	59.7	48.5	29.6	61.0	24.1	39.2	(162.7)

「とてもあてはまる」割合

○ = 指数が100を超える項目

\*  $\frac{\text{女子}}{\text{男子}} \times 100$

図26 自己評価 × 性差

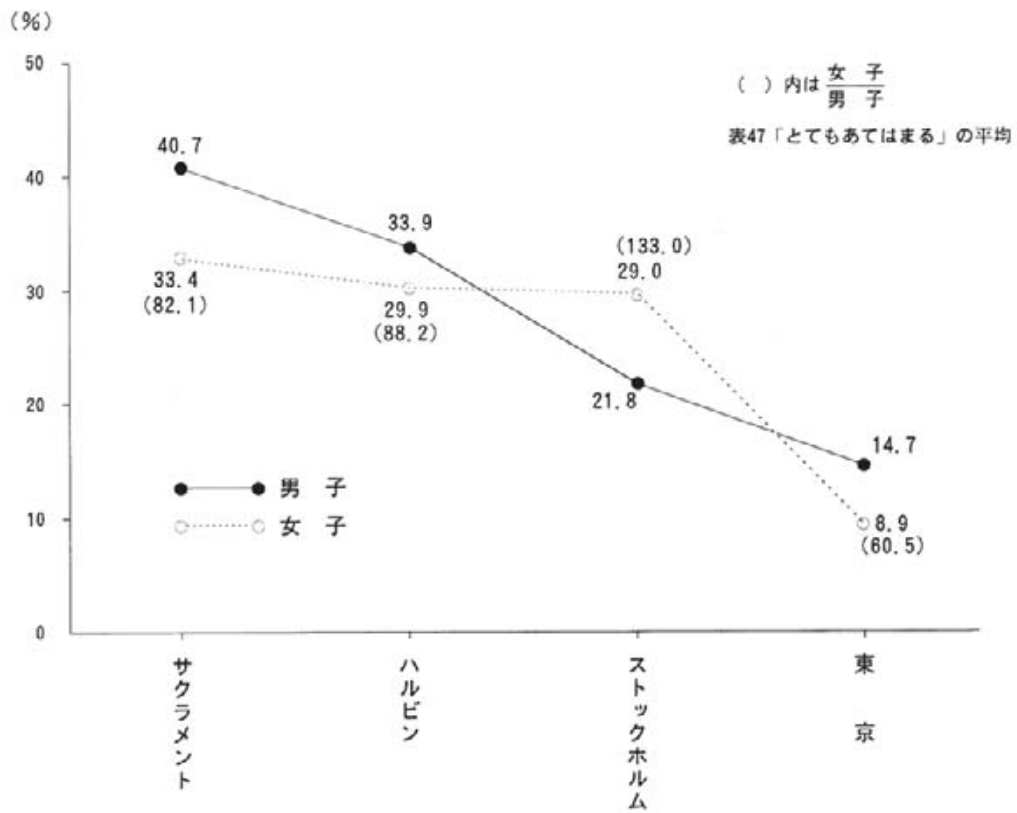


表48 将来の見通し × 性差

(%)

	東京			ハルビン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子
皆から好かれる人	16.5	7.7	46.7	49.1	61.8	125.9	39.3	42.4	107.9	29.9	35.4	118.4
よい父(母)親になる	30.1	22.6	75.1	56.4	66.4	117.7	73.1	79.4	108.6	63.0	61.8	98.1
有名人になる	16.4	5.1	31.1	35.2	27.8	79.0	35.0	21.5	61.4	10.1	28.1	278.2
お金持ちになる	18.2	6.7	36.8	7.8	4.6	59.0	46.4	29.7	64.0	8.2	29.1	354.9
仕事で成功する	24.7	13.1	53.0	67.5	51.9	76.9	29.1	33.2	114.1	21.1	34.0	161.1
しあわせな家庭を作る	42.0	39.4	93.8	71.3	66.1	92.7	66.7	67.4	101.0	72.6	70.8	97.5

「きっとそうなる」割合  
 ○ = 指数が100を超える項目  
 \* 女子  
 男子 × 100

## 11. 学業成績



### ●自己評価との関係))

今回の調査を通して、とくに東京の場合、学業成績が子どもたちの心を重くしているのを感じた。

もっとも、すでにふれたように「勉強が苦手」と思っている子どもの割合は、以下のようになる。

	やや よくない	+	とても よくない	= 小計
東京	18.6	+	7.3	=25.9%
ハルビン	13.5	+	1.6	=15.1%
サクラメント	2.8	+	0.6	= 3.4%
ストックホルム	1.6	+	0.8	= 2.4%

したがって東京では勉強の苦手な子どもが4分の1を超えるのに、サクラメントやストックホルムでは小学生段階で勉強に苦手意

識を持つ子どもはほとんどいない感じになる。

そこで、「とてもよい」から「ふつう」を使って、成績の持つ意味を自己評価とクロスしてみると表49の通りとなる。

成績が「とてもよい」(A)と「ふつう」(C)の割合をC/Aの形で求めているので参照してほしいが、東京の場合、すべての項目で、C/Aが100%を下回るどころか、50%を割っている。

それに対し、その他の社会でも、C/Aは100%を下回っているもので、勉強が苦手だと心が暗くなるのはたしかなようだが、その割合は東京ほど激しくなく、5～7割の項目もみられる。さらにいえば、社会によって項目は異なるが、「スポーツが得意」や「正直な子」などについては成績による開きは少ない。

表49 自己評価 × 成績

	東京				ハルビン				サクラメント				ストックホルム			
	とてもよい(A)	かなりよい(B)	ふつう(C)	C/A	とてもよい(A)	かなりよい(B)	ふつう(C)	C/A	とてもよい(A)	かなりよい(B)	ふつう(C)	C/A	とてもよい(A)	かなりよい(B)	ふつう(C)	C/A
スポーツのうまい子	38.2	16.1	14.6	38.2	26.3	22.3	20.4	77.6	49.3	38.9	36.2	73.4	39.3	24.7	20.3	51.7
人気のある子	37.3	16.4	6.4	17.2	26.3	26.5	10.0	38.0	42.4	22.1	21.3	50.2	21.2	13.5	11.2	52.8
勉強のできる子	56.4	12.5	2.0	3.5	90.0	16.9	3.0	3.3	67.1	27.2	10.2	15.2	42.9	17.2	3.5	8.2
正直な子	31.4	10.2	8.1	25.8	65.0	59.9	47.6	73.2	49.3	33.6	29.1	59.0	43.9	27.8	18.7	42.6
親切な子	33.7	13.9	9.7	28.8	50.0	55.9	48.3	96.6	49.3	36.0	26.8	54.4	48.2	31.8	24.0	49.8
よく働く子	32.4	12.4	12.5	38.6	55.0	48.2	40.7	74.0	63.8	40.8	23.6	37.0	42.9	18.2	7.1	16.6
勇気のある子	38.2	15.7	16.5	43.2	65.0	40.7	27.5	42.3	40.1	37.8	39.4	98.3	46.4	27.9	27.3	58.8

注) 「ややよくない」 + 「とてもよくない」が東京は18.6% + 7.3% = 25.9%だが、ハルビン13.5% + 1.6% = 15.1%、サクラメント2.8% + 0.6% = 3.4%、ストックホルム1.6% + 0.8% = 2.4%なので、クロスでは「とてもよい」から「ふつう」の3段階とした。

## ●将来との関係)))

大学進学希望と成績との関係は表50の通りである。どの社会でも、成績が下位になるにつれて、大学へ入りたいという気持ちが薄れてくる。入れそうもないと、進学を断念するのであろう。

もっとも、どの社会でも大学進学に成績のよさが求められるのはたしかなので、こうした形で、成績が下位になるにつれて進学したい数値が低くなる結果は当然なのかもしれない。

それでは、つきたい仕事と成績との関係はどうか。表51を図27の形でまとめてみた。

サクラメントやストックホルムの子どもたちは、成績がふつうでも成績上位の子どもとほとんど変わらないくらいの見通しを抱いて

いる。しかし東京の場合、成績が下位になると見通しが暗さを増す。

そして、そうした見通しは表52の中にも示されている。サクラメントやストックホルムでは仕事の面はむろん、親になるについても見通しはあまり変わっていない。しかし東京の子どもたちは、成績が下位になると見通しの暗さが増す。

なお、表53の通り、サクラメントの子どもたちはこづかいをもらわない子が32%、そして36%の子が、子どもなりに仕事をして金銭を得ている。子どもが子どもとして自立している、そういうあたりにサクラメントの子どもの自己評価の高さを解く鍵が潜んでいるように考えられる。

表50 大学進学希望 × 成績

	とてもよい (A)	かなりよい (B)	ふつう (C)	C/A
東京	87.1	89.4	69.5	79.8
ハルビン	100.0	99.4	96.4	96.4
サクラメント	77.9	78.0	65.6	84.2
ストックホルム	57.0	44.2	32.8	57.5

表51 つきたい仕事 × 成績

(%)

		とても よい(A)	かなり よい(B)	ふつう (C)	C/A
大学 教授	東 京	24.2	24.6	8.7	36.0
	ハルビン	25.0	18.0	5.2	20.8
	サクラメント	10.6	6.7	8.7	82.1
	ストックホルム	10.8	10.9	7.7	71.3
医 師	東 京	37.7	25.9	18.8	49.9
	ハルビン	35.0	31.1	28.5	81.4
	サクラメント	42.3	37.4	35.7	84.4
	ストックホルム	16.5	21.3	14.3	86.7
裁 判 官	東 京	25.8	16.7	9.0	34.9
	ハルビン	25.0	34.1	21.3	85.2
	サクラメント	44.3	29.8	39.7	89.6
	ストックホルム	19.4	20.2	14.3	73.7
芸 術 家	東 京	34.9	34.8	20.6	59.0
	ハルビン	50.0	35.3	22.5	45.0
	サクラメント	38.2	41.1	38.1	99.7
	ストックホルム	17.2	17.7	14.3	83.1
技 師	東 京	20.6	21.8	11.0	53.4
	ハルビン	15.0	22.2	10.0	66.7
	サクラメント	25.5	18.9	21.4	83.9
	ストックホルム	11.5	12.1	10.1	87.8



図27 つきたい仕事 × 成績  
 - 「とてもよい子」のつきたい割合を100とした場合 -

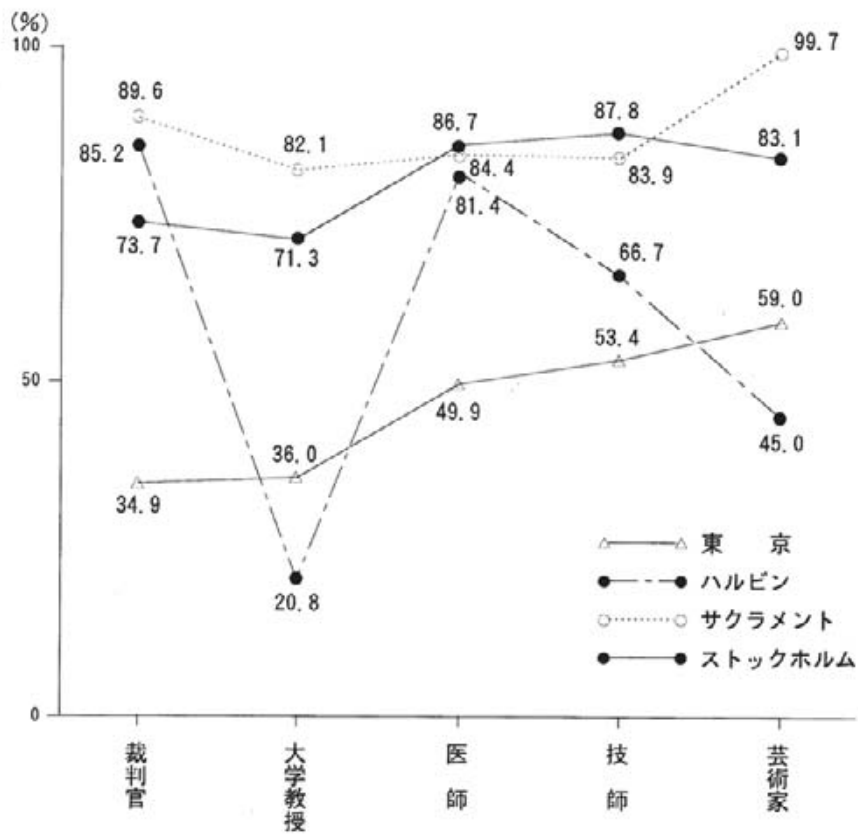


表52 将来の見通し × 成績

(%)

		とても よい(A)	かなり よい(B)	ふつう (C)	C/A
皆から好かれる人になる	東 京	44.1	15.3	9.8	22.2
	ハルビン	50.0	65.7	52.5	105.0
	サクラメント	56.7	41.2	24.6	43.4
	ストックホルム	48.6	29.1	23.2	47.7
よい父(母)親になる	東 京	56.9	35.6	23.7	41.7
	ハルビン	68.8	56.7	66.1	96.1
	サクラメント	81.9	74.6	75.6	92.3
	ストックホルム	81.0	61.5	48.2	59.5
有名人になる	東 京	30.4	12.5	9.1	29.9
	ハルビン	51.2	41.5	28.4	55.5
	サクラメント	34.7	23.0	24.0	69.2
	ストックホルム	32.8	15.8	10.8	32.9
お金持ちになる	東 京	33.7	16.7	10.6	31.5
	ハルビン	9.1	8.2	7.2	79.1
	サクラメント	40.0	34.5	39.2	98.0
	ストックホルム	29.2	17.1	11.4	39.0
仕事で成功する	東 京	51.0	27.3	16.3	32.0
	ハルビン	61.2	73.6	56.3	92.0
	サクラメント	87.4	79.0	68.0	77.8
	ストックホルム	44.1	25.9	15.9	36.1
しあわせな家庭を作る	東 京	68.6	48.6	38.5	56.1
	ハルビン	87.3	84.1	85.9	98.4
	サクラメント	84.6	84.1	83.2	98.3
	ストックホルム	77.4	75.5	60.8	78.6

「きっとそうなる」割合

表53 アメリカの子どもの金銭事情

(%)

おこづかい	もらう	もらわない
	67.7	32.3
おこづかい	(週に) ↓ →	2.00ドル以下 23.2
		2.01~3.00ドル 14.1
		3.01~5.00ドル 33.1
		5.01~10.00ドル 19.9
		10.01ドル以上 9.7
アルバイト (仕事)	している	していない
	38.0	64.0
アルバイト (仕事)	(週に) ↓ →	2.00ドル以下 15.7
		2.01~3.00ドル 8.3
		3.01~5.00ドル 21.6
		5.01~10.00ドル 23.0
		10.01~20.00ドル 16.7
		20.01ドル以上 14.7